

貨幣の本質、觀念と體象と現實

佐原 貴臣

貨幣は自由主義經濟のみの存在である(註)。自由主義經濟は、普通には私有財産と、行爲の自由とを基礎とすると云はれ、正確には財と人間心身の私有、從てそれらの私用の自由を基礎とする。他方に於て社會の殆ど凡ての人は、自己の所有する財(身心の發動たるその用役をも含む 以下同じ)についてそれ〴〵相對的過不足を感じ、然も過と不足とが人により相交错してゐる。そしてかゝる人々の集合する社會に於ては、財は交換によつて他の財を獲得し得る關係を生ずる。蓋し甲がa財について過剰を、b財については不足を有するとし、乙は丁度その反對の狀況に在るならば、甲はa財を與へてb財を、乙は反對にb財を與へてa財を得るを以て、甲乙の双方にとつて利益とするであらう。然も甲はa財を過剰に所有するには相違ないが、之に對して乙が不足を感じて居ることを知ると共に、自らもb財については不足を感じ居り、何等かの方法により之を獲得せねばならぬ狀況にあるから、a財を無償にて乙に與へることを肯ぜざるべく、乙もb財について同様であらう。この場合に甲乙兩人を満足せしめる方法は、言ふまでも

なく、甲はa財を交付し、乙はb財を交付し、財と財とを交換することである。その結果a b二財は、甲乙二人の間に於て、相互に他の財を獲得し得る關係、即ち他財獲得力、交換能力、又は購買力を有するに到る。この他財獲得力乃至購買力が財の價值である。かくて價值は自由主義社會、即ち財の私有されて居る社會に於て、從て私有されて居る財が有するところの他財獲得力乃至購買力である。また財に關してはあるが、人と人との關係に於て發生するものである限りに於ては、價值は社會的範疇に屬し、物能又は利用の如く自然的範疇ではない。また價值は所有又は所有者と離るべからざる存在であつて、財に於ても貨幣に於ても、その所有者が、財又は貨幣等につき有するところの他財獲得力である。個々人の觀點を離れ社會の觀點から見ても所有者なき物、即ち無主物はその物が無主物で居る限り價值（他財獲得力）を有し得ず、之が何人かの所有に歸した曉にのみ價值を發揮し得るに到る。かくて價值は所有者との關係に於てのみ存在し、所有者なき價值は自由主義社會にはあり得ず、價值は必ず何人かの所有する價值である。正確に云へば經濟主體の所有する價值である。そはともかく價值は財と人、所有者と被所有物、評價主體と評價對象とあつてのみ存在するものである。

さて價值は財にある。更に正確には、交換關係に織込まれた財が有するものである。然も財をその所有者が所有して居る限り、價值はその財の中に籠つて居て之と離れず、財から分離した存在とはならない。然るに所有者が財を賣却すると賣手から見ると、茲に始めて價值は財から遊離し、財以外に出で、財と分離した所在を持つに到る。例へば財を賣却すれば財は賣手即ち舊所有者の手から離れるにも拘らず、賣手はこの代償として貨幣又は買手に對する債權を取得する。之等貨幣又は債權はいづれも他の財を獲得する力即ち價值である。賣手が得たこの抽象的無形的存在

たる他財獲得力は云ふまでもなく、今賣却した財から得たものである。財は買手に移るに拘らず、財に内在して居たところの他財獲得力即ち價值が、財から遊離して、財とは別個の存在となり、財の舊所有者たる賣手の手に留つたのである。そはともかく價值は財が交換關係に織込まれることによつて發生し、交換せられることによつて財から遊離して財以外に出る。かくて價值は交換關係と不可分の關係にあり、また交換の手段たる貨幣に價值の不可缺なる所以も亦茲にある。

さて財の舊所有者が、その所有財を賣却することによつて財から遊離せしめ、遊離状態となし、流通形態をとらしめたところの價值は、財を賣却することによつて得たものであると共に、やがて後日、之を以て他の人から、その所有財を獲得するために利用するものであり、また利用し得るものである。その點に於て、この價值は貨幣と全く同じであり、貨幣の一種と看做し得る。否これこそ貨幣の最も純粹な存在である。故に之を觀念貨幣と呼び、その價值を觀念價值と呼ぶこととする。觀念貨幣と呼び觀念なる形容詞を冠する所以は、本稿の進むに従ひ明瞭となる。觀念價值と呼ぶは觀念貨幣と呼ばれるものが有する價值の意であつて、價值そのものが抽象的觀念的なり（勿論その通りであるが）との意味からではない。

二

觀念の存在はやがて、體象の存在を示唆する。貨幣に於ける體象は、先に述べた觀念貨幣をその内部に包み之を體現するところの媒體である。觀念に對して體象であり、内容に對する外包である。構成的因子なる語を以てするなら

ば前者は貨幣の不可缺なる構成的因子であり、後者は手段としての構成的因子である。觀念貨幣の全く無形抽象的なに對して、媒體としての貨幣は預金通貨を除けば何等かの程度に於て具體有形的である。かくて先の觀念貨幣に對して、この媒體外包としての貨幣を體象貨幣と呼ぶこととする。

鑄貨に於ける體象は、金屬の貨幣形態に鑄造されたものである。之は貨幣の材料とは異つた存在である。その發生は、法律的には、鑄貨に法貨能力の賦與された時である。然し法貨能力に關する法律の規定は、たゞ總括的に抽象的に規定するに止まり、個々の鑄貨に及ばぬ。個々の鑄貨にこの法律の適用されるときが、その鑄貨に法貨能力の發生するときであるが、それは事實上は中央銀行が之を造幣局より受領し、之をその運用流通する貨幣額中に計上するときであらう。中央銀行の手を経ずして、金輸納者が直接に造幣局より鑄貨を受取る場合には、造幣局が之を交付する時が法貨能力の賦與される時であらう。

以上は法律上の事實であるが、社會的經濟的には貨幣材料が鑄造せられたのみにては足らず、社會が之を貨幣として受納する意志を發表した時に、鑄貨なる體象貨幣が發生するものと考へるべきであらう。尤も社會はかゝる意志をたゞ事實の上に於て暗黙の間に示すに止まる。そして體象貨幣なる概念は、經濟的概念であるから、その流通場裡に登場せる後、登場してゐる間のみの概念である。從て造幣局に於て製造せられたのみにて、流通場に登場せぬ間は、未だ體象貨幣と云ふことが出来ない。たゞ貨幣と同一形態をとつた金塊であり、物品であるに過ぎない。また鑄貨が體象貨幣たらざるに到るとき、即ちその消滅するは、社會が之を貨幣として受納せず、受授することを拒否するときである。具體的には鑄潰され、外國に輸出されるとき、又は中央銀行が、之を流通せしむる意志を放棄するときであ

る。中央銀行が流通せしむる意志を放棄するは鑄貨が磨滅毀損等のため、再び使用に堪えざるものとして廢棄する場合と、然らずして、再び使用に堪うるも一應流通貨幣より除外する場合とある。ともかく、かくの如く、流通場より退場した後は、もはや體象貨幣ではない。

不換紙幣に於ては、言ふまでもなく一定の形態印刷をもつた紙券が、その體象貨幣である。この場合にも、紙はその材料に過ぎず、それ以上に一定の形式を備へ、且社會的に受領せられるに到つたものである。

兌換券については兌換券そのもの、即ち日常目睹する紙券が體象貨幣である。紙は材料であつて、體象貨幣に非ざること、不換紙幣に於けると同じである。かく、紙券を兌換券の體象貨幣なりとするに對しては、その背後の正貨準備を體象貨幣とすべしとの主張があるであらう。然し準備は、如何に完全なる鑄貨の形態を有するとも、之を兌換券の體象と見ることが出来ない。蓋しその準備は、流通場に於て貨幣たる職能を盡して居らず、たゞ兌換券の準備として、銀行の庫中に眠るに過ぎないからである。その點に於ては、發券銀行が保有する他の種類の發行準備たる有價證券等が貨幣に非ざると全く同じである。但し、兌換券が兌換せられて發券銀行の庫中に歸り、之と兌換せられて鑄貨が、流通場に出て行つたとすれば、その兌換券はもはや兌換券に非ずして、單なる紙片と同性質のものとなり、流通場に出た鑄貨が、貨幣となつたのである。かくて兌換せられるまでは、紙幣たる兌換券が完全なる貨幣であり、體象貨幣である。準備は如何なる形態のものとも雖も準備であつて、財産の一種であり、貨幣ではない。

預金通貨については、その體象貨幣が預金そのもの、小切手、帳簿上の記入のいづれなるかについて議論があり得る。然し吾々は預金そのものを以て、預金通貨の體象とする。蓋し財を賣却した結果がその増加となり、財を購買す

れば減少し、それ自ら購買力を有するからである。そして、小切手は預金通貨の移轉の手段であり、帳簿上の記入は預金通貨の存在高を記録し立證する方法たるに止まるものと考へる。また、支拂準備金その他の資産が、預金通貨の信用又は購買力に影響する事實からして、之等の支拂準備金又は資産を以て、預金通貨の體象とする主張もあり得るであらうが、之等はたゞ預金通貨の價值に影響あるものたるに過ぎず、預金通貨と混同すべきではない。鑄貨より兌換券に到るまでの貨幣體象が凡て有體的であるため、凡て貨幣は有體的たるを要するかの如き先入主に囚はれて、預金通貨の場合にも、預金の如き無形的なるものを貨幣として概念し得ず、準備又は帳簿記入の如く、多少とも有形的可視的なるものを貨幣と考へんとするのであらう。然し有形的なりや否やは、貨幣たるや否やの決定點ではなく、有價的なりや否やがその決定點である。

預金通貨なる貨幣體象の發生は、その預金の預入れの時ではなく、之を貨幣として、換言すれば價值交通手段として用ひることに、その所有者即ち預金者が決意したとき、又は社會が同意した時である。事實上は小切手を振出せる時であらう。また預金通貨の消滅は、預金の全く引出されて殘額なきに到つた時は勿論であるが、預金として存続しても、預金者が之を流通用には用ひざることに決意せる時である。恐らく利殖を目的とするに到つた時であらう。

社會により貨幣として授受せられる性質を假に社會貨幣能力と呼ぶならば不換紙幣並に兌換券にあつても、その體象貨幣としての發生は、社會貨幣能力を有するに到つたときであり、その認められざるに到つたとき、體象貨幣として消滅するときである。現實には、發券銀行が之を運用貨幣中に計上せる時に發生し、之より除外せるときに消滅する。

預金通貨には勿論法貨幣能力は認められてゐない。然し社會貨幣能力は通常の状態に於ては認められて居るが、恐慌又

は銀行の不信用破綻等の場合には認められなくなる。その認められてゐる間のみ預金通貨が貨幣體象として有効である。

實物貨幣は言ふまでもなく商品から進化したものである。自然交換に於ては、交換當事者は交換する二財につき、その物能を目標として交換せるに反し、間接交換に於ては第三對象を用ひるのであるが、此第三對象はもはや物能の故に受授せられるに非ず、購買力、即ち價値の故に交換せられる。かくの如き第三對象として用ひられるものが貨幣であり、然も最初に表れたものが恐らく實物貨幣であつたであらう。そはともかく物能が目標とせられず、價値の故に授受せられる限り、實物貨幣も勿論貨幣であり、實物そのまゝにて實物貨幣に於ける體象貨幣である。法貨能力は勿論問題とならないが、社會貨能力は當然必要である。

三

體象貨幣には、多くの場合、材料がある。體象貨幣の材料とは、言ふまでもなく、貨幣體象を構成してゐる物質である。鑄貨に於ける金屬、不換紙幣、兌換券に於ける紙等の如きである。兌換券に在つては、既述の如く兌換券そのものが體象貨幣であるから、準備たる正貨を構成する金屬が兌換券の材料に非ざるは説明を俟たない。預金通貨についても、小切手、支拂準備金等がいづれも體象貨幣に非ざる故、之等を構成する物はいづれもその材料ではない。預金通貨については材料なしとせねばならない。實物貨幣に在つては、介殼又は秤量金屬等が實物そのまゝにて、體象貨幣たると共に、貨幣材料である。

觀念貨幣は等しく貨幣なる名稱で呼ばれては居るが、本來價值そのものであるから、材料はあり得ない。此價值を
含んで居た財には勿論材料があつたが、觀念貨幣は既に財ではなく、その價值の遊離したものであるから材料はない。

四

先に觀念貨幣と名付けたものは、本來價值であつた。財の價值が財から遊離したものであつた。そして觀念貨幣の
價值を觀念價值と呼んだ。

材料價值とは體象貨幣の材料の價值である。例へば鑄貨に於ける金屬の價值、兌換券不換紙幣に於ける紙の價值で
ある。預金通貨には材料がないから、當然材料價值はあり得ない。實物貨幣に在つては、その實物の商品としての價
値がそれである。材料價值は言ふまでもなく、材料の品質と數量とにより定まる。

體象貨幣が體象貨幣側の評價過程に依て有するに到る價值を貨幣の體象價值と呼ぶこととする。價值は本來二物の
相對關係であるから、一方のみにつき價值を云爲するのは誤りの如くである。然し財も貨幣も凡て之と交換せられる
相手の財又は貨幣の事情を離れて、それ自身の評價過程を有し、相手のものには何の變化も起らずとも、その價值が
變動する。例へば他の凡ての財の品質數量に何の變化もなき場合に、小麥の品質數量が變化すれば、小麥の有する他
財購買力が變化し、同時に他の財の小麥を購買する力も變化する。この場合には他の財の價值を離れて、小麥の價值
が變化したと云ふを妨げないであらう。同様に貨幣に於ても、他の商品一般は少しも變化せざる場合に、貨幣の品質
數量等が變化すれば、その價值に變化を生ずるは當然であらう。かく貨幣側のみの事情により評價せられ決定せられ

る貨幣の價值が、貨幣の體象價值である。

例へば本位鑄貨に於ては、その體象價值は、勿論材料價值と全く無關係には非ず、寧ろ密接不離の關係にあることは否定すべくもない。然し一度鑄貨として貨幣となつた上は、財との關係交渉は暫く措くとするも、尙、材料と異なる評價過程を有し、從て量に於ても、その材料價值と異なる量の價值を有すべきは想像に難からざるところである。之が本位鑄貨の體象價值である。また體象價值は貨幣側のみの評價過程により生ずる價值であるから、觀念價值と異なるべきは言を俟たないところである。

不換紙幣に在つても材料と異なる評價過程を有し、從て材料價值と異なる量の價值あるは何人も知るところである。例へば材料價值は殆ど無に近きに拘らず、遙かにそれ以上の購買力を有してゐる。之不換紙幣が材料價值と異り、不換紙幣側のみの評價過程により、成立する體象價值の存在を示すものである。勿論この場合にも觀念價值とは異なる。鑄貨についても補助貨の體象價值は、不換紙幣のそれに近きものである。

同様にして兌換券に在つても體象價值の存在を知ることが出来る。材料を離れ、貨幣として貨幣側のみの評價過程により成立する評價がそれである。預金通貨に在つても、既に預金通貨となつた曉には、その價值は商品側の變動とは別個に預金通貨側の事情により別個の評價過程を持ち、その價值が影響決定される。之を預金通貨の體象價值とする。實物貨幣に在つても、同様にして、貨幣となつた曉には、之と同様の未だ貨幣とならざる財のまゝの實物と異つた評價過程を持つ。此場合實物貨幣として貨幣側だけの評價過程により有するに到る價值がその體象價值である。

各種の貨幣の體象價值が何に由來するかについては、素材主義者は材料價值とする點に於て一致してゐる。今極め

て簡單にこの點に觸れるなら、本位鑄貨に於ては材料價值がその體象價值の一つの源泉であることは否定すべからざる事實であらう。觀念價值が材料價值と無關係なるは言を俟たぬが、體象價值が材料價值と無關係なり得ざることも明かであらう。素材主義者の主張はその限りに於て妥當性を有するものとせねばならない。たゞ材料價值の存在を知つて體象價值の存在を知らず、或は兩者を同一存在の如く考へたのは彼等の誤りである。

名目主義者の中には職能價值を力説する論者がある。そして職能價值を以て、貨幣が職能を盡すことにより、貨幣の中に發生するところの價值であると説明する。然し吾々の見解によれば、職能を盡すことにより貨幣に價值發生するに非ずして、貨幣が先づ價值あるが故に職能を盡し得るのである。蓋し職能は貨幣のなす作用であり、働きである。然るに貨幣がかく作用し、働きをなし得るためには、貨幣は作用、働きをなす前に、先づ、かゝる作用をなし得る力、能力を有して居ることを要するは論理の當然であらう。能力なくして何等の作用をも從て職能をも盡し得ざるは、貨幣のみならず、各種の社會機關乃至自然現象に普遍的事實である。而て貨幣に於ける能力因子は價值以外にあり得ない。然れば貨幣も職能に先立つて價值を有して居るべく、職能を盡すことによつて發生する價值たり得ない筈である。然るに謂ゆる職能價值の存在を主張する論者によれば、名目的貨幣は、職能を盡すことにより價值發生すとなし、かく發生せる職能價值が職能を盡すことを可能にすと云ふ。然し之は順序を顛倒するものである。從て吾々は職能價值なるものあり（之が貨幣の體象價值となる）との主張を肯定することが出來ない。

職能價值を否定し、然も貨幣がその職能を盡し得るために價值を必須とすれば、不換紙幣の如き謂ゆる名目貨幣は、如何なる種類の價值を有するかの問題が起る。之に答へるものは象徴價值である。種々の象徴は皆實物と同じ作用あ

るものとして、人間の心理を支配する。言語偶像等皆然り。不換紙幣も之等と同じく一種の象徴である。即ち財は實物として、社會に於て交換により他の人よりその所有の價値物を獲得する力を有する。然るに不換紙幣も之と同一能力あるものとして人間の心理を支配する。逆に云へば人間の心理が支配される。或は人間の心理がかく信ずる。實物ならずして實物と同様に人間の心理を支配するから、象徴である。不換紙幣も之と同様である。實物の價値を實物價値と云ふならば、之を象徴價値と呼ぶことが出来るであらう。

象徴價値が如何にして可能なるかは、心理學社會學等に對する課題であるが、常識的に云ふならば、習慣傳統等によつて生じた、人間の信仰であると云ふことが出来やうか。

兌換券の價値については、代表價値なる語を用ひ得ないであらうか。茲に代表すとは、言ふまでもなく、兌換券の背後にある價値、即ち發行準備の價値を代表すと云ふ意味である。兌換券の背後に、或率の正貨準備又は金地金等が存在し、隨時之と交換し得るならば、世人の心理に於ては、或程度まで兌換券が之等準備を代表するものと考へるであらう。代表物が被代表物と同一性質を帯び、同一作用を發揮すとすは、人間の心理の當然の傾向であるやうである。人間の心理は之等二物を全く無關係であると考へる程論理的ならず、又物事を區別して考へず、また謂ゆる理論に囚はれない。従て發行準備と兌換券との間に代表又は代理の關係を認め、發行準備が有價値なる場合に、之等と密接なる關係にある兌換券が、その價値を代表すと考へ購買力即ち價値を發揮するは當然であらう。この場合は象徴とは異り代表である。故に之を代表價値と稱し、貨幣の體象價値の一の發生源としたい。

以上の如くして、材料價値、象徴價値、代表價値が貨幣の體象價値を構成する。従て材料價値が體象價値の唯一源

泉なりとする素材主義者にも誤りあり、また材料價值が體象價值と全く無關係であるとする名目主義者にも誤認がある。

貨幣に關する觀念價值と體象價值との識別が從來存在せざるものなる爲、素材主義者の貨幣價值並に、名目主義者の職能價值が、觀念價值、體象價值のいづれに關するものなりやは必ずしも明瞭でない。今右に於ては、假りに體象價值に關する主張と見做して之に對する吾々の見解を述べた。

五

さて體象貨幣と觀念貨幣との關係を述べなければならぬ。然もその爲には交換經濟の機構を一瞥する必要がある。交換は當然分業を前提とする。分業の結果、各經濟主體はその生産せる財を社會に提供し、自己の必要財を社會から供給を受ける。然るに現在の發達した資本主義社會に於ては、土地勞働資本企業者なる生産要素が結合して企業を形成し、企業が一單位となつて生産を行ひ、この生産物を社會に提供して賣却代金を得、この賣却代金を地代賃銀利子利潤として生産要素に分配する。各生産要素は之を所得し、この所得を以て自己の必要品を購買し消費する。然るにかく購買し消費するは、先に企業が生産し社會に賣却せると同一財である。かく交換社會に於て生産せられ消費のため社會に提供せられる故、この生産物は社會的生産物と云はれる。またかく財を購買する消費者も、先に生産要素として各種の生産力を提供せると全く同一人であり、たゞ先には生産者として、後には消費者として、即ち變態して表れるに過ぎず、全く同一人である(註二)。

貨幣の本質、觀念と體象と現實

さて右の過程に於いて貨幣に即して觀察すれば企業者は財を生産し終ると、之に相當する金額の手形を振出し、之を銀行に割引せしめ、その手取金を或は鑄貨、兌換券、不換紙幣にて受取るか、又は手取金を直ちに銀行に當座預金として預入れ、以て預金通貨とする。かく銀行により鑄貨兌換券、不換紙幣が發行せられ、又は預金通貨の設定せられることが、經濟學的に見た貨幣の發生である。即ち貨幣は商品即ち財の發生と共に發生する。企業者はかくて得た貨幣を以て生産要素たる地主、勞働者、資本家、及び企業者に地代、賃銀、利子、利潤を支拂ふ。地主以下の生産要素はかくて得た地代以下の所得により先の社會的生産物を買入れ消費する結果、社會的生産物は消滅する。他方、企業は地主以下の生産要素に對し、その所得と引換へに社會的生産物を賣却し、その賣上代金として貨幣を入手し、之を銀行に支拂ひ、先の手形を取戻す。預金通貨の場合には、手形を取戻すと共に借入金を返済し、從て當座預金が相殺される。いづれにしてもかくて一方に於ては社會的生産物は消費せられて存在を失ひ、當然その價值を失ふと共に、他方貨幣も最初の發行者たる銀行の庫中に復歸し、又は預金通貨が相殺されて流通場裡より退場する。貨幣は社會的生産物と表裏をなし、その發生消滅を共にする。

さて右の過程に於て企業はその社會的生産物を賣却した時に手形を發行し、各種の貨幣を獲得する故、企業の立場から見れば、社會的生産物なる價值を手離し失ふ代りに、新にその代償として貨幣なる價值（購買力）を得る。從て企業の立場から見れば、今得た貨幣は、社會的生産物なる財の價值の代りであり、代償であり從てこの貨幣の價值は今手離した社會的生産物の價值を、體現し具象してゐるものと考へるであらう。更に企業はかくて得た貨幣を地主以下の生産要素に分配し、貨幣は地代以下の所得となり、地主以下の生産要素によつて、所得される。かく生産要素が

所得せる貨幣を、地主以下の生産要素の立場より見れば、各生産要素は、その所有したる土地、労働力、資本、企業能力の用役を企業に賣却せる代りとして、代償として取得したのであるから、彼等は土地以下の生産要素の用役の價值が、今受取つた貨幣の中に、體現し具象されてゐるものと考へるであらう。かくて貨幣は企業に於ては社會的生產物なる財の價值を體現するものであり、生産要素に於ては、土地以下の生産要素の價值を體現するものである。然るに生産要素を暫く財と見做すならば、右の企業並に生産要素の兩者を通じて、貨幣は常に財の價值を體現するものである。然も經濟社會を理論的に典型化すれば、企業と生産要素のみとなり、他は或はその變態であり、或はその延長であるに過ぎないから、企業と生産要素との兩者に於て貨幣が財の價值を體現すてふ事は、貨幣が社會全體に於て財の價值を體現するものであると云ふ事を意味する。或は財（人間の心身の用役を含む）の價值が貨幣の價值に變態せるものとも云ふことが出来る。然るに財の價值は先に吾々が云ふところの觀念價值である。従て貨幣は觀念價值（財の價值の遊離せるもの）を體現するものである。

然るに貨幣が觀念價值を體現する過程は、社會的生產物が生産要素に對して販賣せられる場合と、生産要素により土地以下の生産要素の用役が企業に販賣せられる場合とである。土地以下の生産要素の用役が企業者に交付せられる場合は、普通には販賣とは云はれず、土地の場合には土地の貸借と云はれ労働力の場合には雇傭と云はれる如くそれぞれ特殊の名稱を有する。然し經濟學的にはそれらの用役の賣買と見るを妨げないであらう。かくて社會的生產物の場合にも、生産要素の場合にも共にそれらの賣却であり、その賣却の代償として支拂はれる際に、社會的生產物又は生産要素の價值が貨幣に體現されるのである。

以上の如くして貨幣は、自由主義經濟に必然の過程たる賣買に於て代償又は對價として用ひられ、その過程に於て觀念價値を體現するのであるが、代償又は對價たり得んが爲には、代償物は代償として用ひられる以前より、價値を有して居ることを必要とし、從て代償となつた後に又は代償となることによつて、發生した價値であつてはならない。然もかく代償たる以前より有したる價値たるべしと云ふことは、歴史的に、即ち、未だ全く貨幣の存在せざりし社會に始めて出現する貨幣についてののみならず、その後貨幣經濟の發達したる、例へば現在の社會に於て用ひらるゝ個々の貨幣についても云ひ得る事實である。而て代償として用ひられる以前より有したる價値とは、體象價値のことではない。また貨幣たりし後に、又は貨幣たることによつて發生したる價値たるべからずとは、謂ゆる職能價値たるべからずとの意であり、觀念價値たるべからずとの意である。名目主義者は、或は體象貨幣はやがて財の價値即ち觀念價値を體現するが故に、貨幣は體象價値を必要とせずと主張するかも知れない。然しそれは誤りである。蓋し體象貨幣が觀念價値を體現すてふ現象は、體象貨幣が財の代償として用ひられると云ふ過程、即ち代償過程を経過することによつてのみ可能である。然るに、代償たらんが爲には、代償物は代償たる以前より價値を有して居ることを要するは、自由主義經濟社會に於ける論理の當然であらう。然もこの過程を通ぜずしては、體象貨幣が觀念貨幣(觀念價値)を體現し得ずとすれば、貨幣は觀念價値を體現し居るが故に、體象價値を要せずとの主張は根據を失ふであらう。また、體象貨幣が觀念價値を體現すとは、社會的觀點より見れば體現し居ると同一状態を呈すと云ふまでにて、自由主義社會に於ては法律も觀念價値を體現し居るが故に、貨幣を受取るべしと規定し強制するものに非ず、社會も亦同様である。たゞ授受する個々人が、その貨幣が體象價値を有すと信するが故に之を受領するのであつて、それ

上に出でない。法貨能力も謂ゆる社會貨能力も體象價値の存在に關するものであり、觀念價値を體現し居るや否やは及ばない。之等の見地よりして、觀念價値を體現し居るが故に、體象價値を不要とすとの主張もし發生すともそれは誤りである。要するに吾々は賣買なる事象を、共產主義社會に於ける配給切符との交換と本質的に異なるものと考へ、賣買は價値による價値の獲得と考へ、體象貨幣の觀念價値體現の過程も、この賣買乃至價値現象と不可分關係にあるものとする。之吾々が曾て貨幣の職能を賣買手段職能乃至對價職能と呼び(註三)、貨幣の構成的因子を價値となしたる(註四)と關聯するものである。

ともかく、觀念價値乃至觀念貨幣は體象貨幣によりて體現され具現される。言ひかへれば體象貨幣を媒體とする。また體象貨幣の觀念貨幣に對する限りの職能は、觀念貨幣(觀念價値)を内包し、體現するに在る。かく體象貨幣が觀念貨幣を體現するとき、茲に始めて現實の貨幣、即ち、現實貨幣が出現する。現實貨幣とは、言ふまでもなく、鑄貨以下、兌換券不換紙幣預金通貨或は更に實物貨幣である。たゞ體象貨幣は之等鑄貨以下が、未だ觀念貨幣を體現せざる間の存在であり、現實貨幣としての鑄貨以下は之を體現して居り、從て現實貨幣は體象貨幣と觀念貨幣との二重性格を具備せるものである。鑄貨以下は、觀念貨幣を體現すると否とにより外觀に異るところはないが、兩者の間の經濟學的差異は、何人も否定し得ざるところであらう。要するに觀念貨幣は Platon の idea であり、體象貨幣は body である。現實貨幣は之等兩性格を併せた存在である。

六

體象貨幣と觀念貨幣との關係については、二の場合がある。一は體現すべき觀念貨幣の實存する場合であり、二はその實存せざる場合である。先づ一の場合から述べる。

歴史的に過去に遡つて、社會最初の實物貨幣は既に實物貨幣となつた曉に於ては、物能を目的として授受せられず、賣却せる財に對する代償たる價值として受取られるであらう。然るに、賣却せる財の代償たる價值は、即ちその財より遊離せる價值であり謂ゆる觀念價值に外ならない。然もこの觀念價值は今受取つた體象貨幣の中にあるから、この實物貨幣たる性格と觀念貨幣たる性格とを兼備へて居り、從てこの場合は觀念貨幣が實存してゐる場合である。

右の事實を今日の狀態に見るに、今日の交換經濟に於ては、企業者が社會的生産物を生産せるときに之を内容とする手形を發行し、之を銀行をして割引せしめ、鑄貨以下の各種の貨幣を得るのであるから、この場合に發生する貨幣は凡て取引せらるべき財が存在して發生するものである故、謂ゆる觀念價值あつて發生せるものである。その形態が鑄貨なるか、兌換券不換紙幣なるか、更に預金通貨であるかは問ふところでない。

かく觀念價值が實存して發生した現實貨幣は、曾てこの觀念價值を含んで居た財、即ち社會的生産物が流通場裡より退場すると共に、貨幣も流通場裡より消滅し、財とその運命を共にすること前節に説明せる如くである。

右に述べたところは、體象貨幣が、既に生産せられて存在する社會的生産物の價值を體現する場合であるが、之と異り、近き將來に於て存在するに到るべき、即ち近く生産せらるべき社會的生産物の觀念價值を體現する場合がある。その代表的なるは、社債に應募し、又は生産財購入の爲の借入金調達に應ずるための貨幣増發の場合である。之等の社債乃至借入金等は、既存の生産財を買入れ消費するに相違ないが、消費を以て終結するのでなく、やがて之等生産

財に含まれてゐる價值をも含ました新生産物を生産し社會的生産物として社會に提供せんが爲である。そしてこの新生産物の賣上代金が、社債又は借入金の返済に充てられる。従てこの場合には貨幣は社會的生産物より先に發生し、貨幣發生の際には社會的生産物はまだ存在しないが、やがて之に相當する社會的生産物が提供される。發生の時間關係は逆であるが、ともかく貨幣に對立し、貨幣により取引せらるべき對象たる財があり體現すべき觀念價值が存在する場合である。

次に觀念價值なくして、現實貨幣の發生する場合がある。觀念價值は先にも述べた如く財の價值の遊離したものであり、従て財と、かく遊離せる價值とが別個に存在し、その財が、かく遊離した價值を體現する貨幣により、賣買取引せられる關係に於て存在しなければならぬ。換言すれば財と、その財より遊離した觀念價值とが賣買過程に於て對立し得る状態にあるを要する。かゝる状態にある觀念價值あり、之を體現するものとして現實貨幣の發生する場合が右に述べたところである。然るにかゝる状態にある財なくして現實貨幣の發生する場合がある。

例へば金鑛より採掘された金が輸納されて金貨となり、社會に流通する場合である。この場合には、金なる財、即ち價值は新に生産せられたには相違ないが、之は貨幣に鑄造せられて仕舞ふ結果その金の價值は、之から鑄出される金貨に對立し、その貨幣により賣買取引せらるべき状態には置かれて居ない。従てこの場合は觀念貨幣なくして貨幣の發生する場合である。

或はこの金が發行準備となつて、兌換券の發生する場合にも、金は兌換券なる體象貨幣の外に在るには相違ないが、その金は準備として發券銀行の庫中に藏せられてゐるため、この兌換券により賣買取引せらるべき状態に置かれてゐ

ない。従てこの兌換券も、觀念價值なくして發生せるものである。

更に政府が公債を發行せんが爲に、先づ發券銀行をして、不換紙幣を發行せしめ之を直接銀行より借上げ、又は銀行をして一旦國民に貸出さしめ、之を政府が公債應募金として借上げ、この不換紙幣を以て政府が總ての支拂に充つる場合にも、この不換紙幣は、それが體現すべき觀念價值なくして發生せるものである。

また預金通貨についても、謂ゆる融通手形を割引くことにより發生する預金通貨は、之に屬する。

かく貨幣により賣買取引せらるべき財、即ち觀念貨幣なくして發行せられた鑄貨以下の各種の貨幣は、永久に社會に流通して居り、消滅する機會を持たないのが原則である。例へば右の例に於いて鑄貨を手に入れた金鑛主は、この鑄貨を以て金採掘に用ひた各種生産要素への支拂ひに充てるであらう。然るに各生産要素はかくて得た所得を以て、消費財即ち既存の社會的生産物を購買し消費するのみであつて、この鑄貨により取引せらるべき社會的生産物を生産しない。反之觀念價值あつて貨幣の發生した場合には、觀念價值即ち財が存在し、この財が消費財として消費者の手に入る際に、貨幣が流通場より退場すべき機會を持つた。然るに今茲の例の場合には、貨幣發生と同時に先づ財即ち消費財が購入せられ消費せられて仕舞ふため、貨幣が再び取引せられ、それにより貨幣が流通場裡より退場すべき機會を持たない。従てかゝる貨幣は永久に社會に流通し續けて居ざるを得ない。尤もかくの如くして發生した例へば金貨が發行銀行に歸することはあり得るであらう。然しその場合には先に差入れてある手形あり之を取戻すために之等金貨以下を銀行に提供するのでなく、預金として預入れられるが爲の復歸であらう。蓋しこの場合には手形は差入れられては居ないからである。従てこの場合の金貨の銀行復歸は、必ず之と同額の之に代るべき他種の貨幣、就中預金通

貨の増加を見るに相違ない。従てその社會の貨幣總量は増加せるまゝであらう。いづれにしても觀念價值なくして發行せられた貨幣は、永久に社會に流通しつづけるべき運命を持つ。かゝる事實は右の場合の金貨のみに限らず、他の種類の貨幣にも共通の事實である。かゝる運命を擔つた貨幣の増加が、何等かの程度に於ける謂ゆる悪性通貨膨脹であり、貨幣に關する限り悪性貨幣である。

以上に如くして觀念價值ありて發生せる貨幣なりや否や、即ち良性貨幣なりや悪性貨幣なりやは、鑄貨兌換券等々の貨幣種類によるものでなく、その貨幣の發生の狀況による。即ち等しく鑄貨にても、社會的生産物の生産に伴ひ發生せる貨幣は前者に屬し、之なくして發生せる貨幣は假令金貨たりとも後者に屬する。從來素材主義者が、素材ある貨幣を良性とし、素材なきを悪性と考へたるとは根本的に異なる結論に達する。

貨幣につき觀念價值の有無が問題となるは、貨幣の發生の際、即ち流通の第一歩に於けることであつて、その後には全く同じである。即ち金鑛主が金を輸納して貨幣を得た場合には、彼がかく金貨を得るは先にも述べた如く、觀念價值なくして之を得るものであるが、この金貨のその後の流通、即ち、この金鑛主よりこの金貨を受取る人々は、必ずこの金鑛主に價值ある何等かの財を提供して之を獲得するに相違なく、その點に於て、觀念價值あつて發生した金貨につき、之を第二回以後の流通により入手する人に於けると全く同一である。即ち觀念價值の有無は、たゞ貨幣の發生の際に於ける差異であつて、爾後に於て之を獲得する人は、常に謂ゆる觀念價值あるものを提供せる場合にのみ之を獲得し得べき故、凡ての貨幣に於て同じである。

觀念價值なくして發生する現實貨幣が、交換經濟の機構より見て變則なるは言を俟たないであらう。

貨幣の本質、觀念と體象と現實

七

貨幣即ち現實貨幣は體象貨幣が觀念價值、即ち、社會的生産物の價值を體現したものである。従て貨幣は觀念價值との關係に於ては、之を體現するに止まり、財がその價值を固有する如くには之を固有するを要しない。反之もし之を固有するを要するものとすれば、財は少くも物能を一要素としてその價值を有してゐるから、貨幣も物能を有し財たるを要するであらう。然るに貨幣は觀念價值は之を固有せず體現するに止まる故、茲に貨幣が材料價值を離れて名目化し得る第一歩がある。

然るに貨幣は觀念價值を體現するを要し、之を體現するために體象價值を必要とした。然るに體象價值がもし材料價值を必須とするものであるならば、貨幣は體象價值との關係に於て名目化の可能性を失はねばならない。然るに體象價值は既述の如く、材料價值によつてのみならず、象徴價值代表價值によつても可能である。即ち材料價值を必須としない。茲に貨幣の名目化の可能性の第二歩がある。

かく云ふとき素材主義者は尙も材料價值なくして、如何にして體象價值の存在が可能なるやを反撃するであらう。然し之に對し吾々は價值とは何ぞやを問ひたい。價值は常に繰返す如く、社會に於て交換により他財を獲得する力即ち交換能力乃至購買力である。従て價值は自然的範疇に非ず、一種の社會的範疇であり、従て自由主義社會に於て、之と交換に財を引渡すことを肯ずるものなる限り、それは凡て價值を有するのであり、必ずしも物能を必須としない。然るに價值は材料あるもののみ之を有し得とする見解は、價值が社會的範疇なる所以を解し得ないものである。即ち

素材主義者と吾々とは、價値の性質に關する見解に於て、既に袂を別つて居たのである。ともかく吾々は價値を社會的範疇と考へるが故に、而て材料なくしてあり得るものと考へるが故に、材料價値なき不換紙幣預金通貨の如きものも、よく體象價値を有し得、從て觀念價値を體現し得るものと考へる。

要之吾々も亦貨幣の名目化の可能を信ずるものである。然しその論據を體象貨幣は觀念價値を體現するが故に價値あり、從てこの外に體象價値を要せずとなし、又は體象價値をも有せず、觀念價値を體現することもなしとの意味に於て、貨幣無價値を主張し、名目化の可能を主張するものならば、吾々は同意し得ない。吾々が名目化の可能を主張するは、體象貨幣に關する事實であり、然も體象貨幣は材料價値を必須とせず、象徴價値代表價値の如き名目的價値にて足ると云ふ意味であり、それ以上に一步も出でない。

吾々は曾て貨幣本質の規定は、職能と構成的因子とによるべきを主張した(註五)。然し本稿は後者のみを主題としたから職能の問題には觸れない。(二六〇〇・一・七)

註一 銀行研究三十一卷六號、拙稿、貨幣の構造的因子五節

註二 研究論集、創刊號、拙稿、交換經濟の機構

註三 拙著、貨幣の職能

註四五 研究論集、八卷二號、拙稿、貨幣の本質について